



普及版

吉川英治代表作品

悠久の大自然と治乱興亡果てない

大陸の歴史が育くんだ複雑な

中国の人と心。魏蜀呉

三国の覇権と政治の妙

に学ぶ生甲斐と身の処し方。改

めて日中文化の関連と我が人

生とはとを考える自戒の書。

吉川英治

三國志

七



吉川英治

三 国 志

第七卷 望蜀の巻

三国志 7 卷 (全10巻)

昭和31年11月1日 初版発行

昭和62年1月30日 第68刷発行

著者 吉川英治

発行者 賀来寿一

発行所 株式会社 六興出版

東京都文京区水道2-9-2 〒112

電話東京(943)3431 振替東京 1-92448

印刷 図書印刷株式会社

製本 株式会社 明泉堂

落丁本、乱丁本はお取替えいたします

© 1956 Fumiko Yoshikawa, Printed in Japan

定価はカバーに明記してあります。

ISBN 4-8453-0207-1

目

次

降参船	赤壁の大襲撃	山谷笑う	功なき関羽	一擲三城	白羽扇	黄忠の矢	針鼠	柳眉剣簪	鴛鴦陣
三	一四	二一	三〇	四〇	六〇	七六	八五	九二	一〇四

朝の月……………一三

凜凜細腰の剣……………二〇

周瑜・氣死す……………二八

文武競春……………三三

荊州往來……………四一

鳳雛去る……………五三

醉鼎令……………六〇

馬騰と一族……………六五

不俱戴天……………七二

渭水を挾んで……………八二

火	水	木	金	土		一九三		
敵	中	作	敵		二〇四			
兵	学	談	議		二一一			
蜀	人	・	張	松		二一八		
孟	新	新	書		二二五			
西	蜀	四	十	一	州	図		二三〇
進	軍		二四〇					
鴻	門	の	会	に	非	ず		二四五
珠		二五二						

望
蜀
の
卷

降参船

一

「この大機会を逸してどうしましよぞ」

という魯爾の諫めに励まされて、周瑜もにわかになる。起ち、

「まず、甘寧を呼べ」と令し、営中の参謀部は、俄然、活氣を呈した。

「甘寧にござりますか」

「おお、来たか」

「いよいよ敵へお蒐りになりますか」

「しかり。汝に命ずる」

周瑜は嚴かに、軍をさすけた。

「かねての計画に従って、まず、味方の内へ紛れこんでいる蔡仲、蔡和のふたりを囑とし、是を逆用して、

敵の大勢をくつがえす事。……その辺はぬかりなく心得ておろうな」

「心得ております」

「汝はまず、その一名の蔡仲を案内者として、曹操に降参すと称え、船を敵の北岸へ寄せて、烏林へ上陸れ。そして蔡仲の旗をかざし、曹操が兵糧を貯えおく糧倉へ迫って、縦横無尽に火を放ける。火の手の旺なるを見たら、同時に敵営へ迫って、側面から彼の陣地を攪乱せよ」

「承知しました。して残る一名の蔡和はいかがいたしますか」

「蔡和は、べつに使い途があるから残して行くがよい」

甘寧が退がって行くと、周瑜はつづいて、太史慈を呼び、

「貴下は 三千余騎をひっさげて、黄州の堺に進出し、合淝にある曹軍の勢に一撃を加え、まっしぐらに敵の

本陣へかかり、火を放って焼き討ちせよ。——そして紅の旗を見るときは、わが主呉侯の旗下勢と知れかし」

第三番目に、呂蒙を呼んだ。

呂蒙に向かっては、

「兵三千をひいて、烏林へ渡り、甘寧と一手になって、力戦を扶けろ」

と命じ、第四の凌統へは、

「夷陵の境にあつて、烏林に火のかかるのを見たら、すぐ喚きかかれ」

と、それへも兵三千をあずけ、更に、董襲へは、漢陽から漢川方面に行動させ、また潘璋へも同様三千人を与えて、漢川方面への突撃を命じた。

こうして、先鋒六隊は、白旗を目じるしとして、早くも打ち立った。——水軍の船手も、それぞれ活発なうごきを見せていたが、かねてこの一挙に反間の計を施さんものと手に唾して待っていた黄蓋は、早速、曹

操の方へ、人を派して、

「いよいよ時節到来。今夜の二更に、呉の兵糧軍需品を能うかぎり奪り出して、兵船に満載し、いつぞやお約束のごとく、貴軍へ降参に参ります。依つて、船橋に青龍の牙旗をひるがえした船を見給わば、これ呉を脱走して、お味方の内へ入り込む降参船なりと知りたまえ」

と、言い送った。

密やかに、誠にやかに、こう曹操の方へは、諸事、謀し合わせを運びながら、黄蓋は着々とその夜の準備をすすめていた。まず、二十艘の火船を先頭にたて、そのあとに、四隻の兵船を繋げた。つづいて、第一船隊には、領兵軍官韓当がひかえ、第二船隊には同じく周泰、第三の備えに蔣欽、第四には陳武と——約三百余艘の大小船が、舳をならべて、夜を待ちかまえた。すでに宵闇は迫り、江上の風波はしきりと暴れていた。今晩からの東南風は、昼をとおして、なおもさか

んに吹いている。

何となく生温かい。そして氣懶いほど、陽氣外れな晩だった。

そのためか、江上一帯には、水蒸氣が立ちこめていた。さい先よしと、黄蓋は、纜を解いて、いっせいに発動を命令した。

三百余艘の艤艦は、淙々と、白波を切って、北岸へすすんで行った。——そのあとについて、周瑜、程普の乗りこんだ旗艦の大軀も、颯々、満帆をはためかせながら動いてゆく。

後陣として続いてゆく一船列は、右備え丁奉、左備え徐盛の隊らしかった。

魯爾と龐統は、この夜、あとに残って、留守の本陣を守っていた。

二

その夕、

呉主孫権の本軍は、旗下の勢とともに、すでに黃州の境をこえて、前進していた。

兵符をうけて、その発向を知った周瑜は、すぐ一軍を派して、南屏山のいただきに大旗をさしあげ、まず先手の大将陸遜を迎え、続いて、孫権の許へも、

「いまはただ夜を待つばかりにて候」と、報じた。

かくて、刻々と、暮色は濃くなり、長江の波音もただならず、暖風しきりに北へ吹いて、飛雲団々、天地は不気味な形相を呈していた。

× × ×

ここに夏口の玄徳は、以来、孔明の帰るのを、一日千秋の思いで待ちわびていたところ、きのうから季節外れな東南風が吹き出したので、かねて孔明が言いのこして行ったことばを思い出し、にわかに、趙雲子龍をやって、

「孔明を迎えて来い」

と、ゆうべその船を立たせ、今朝も望楼にあがって、

今か今かと江を眺めていた。

すると、一艘の小舟が、鰐魚のごとく、溯つて来た。近づいて見ると、孔明にはあらで、江夏の劉琦である。

樓上に迎えて、

「何の触れもなく、どうして急に参られたか」と、問うと、劉琦は、

「昨夜来、物見の者どもが、下流から続々帰つて来て告げることには、呉の兵船、陸兵など、東南の風が吹くと共に、もののしく色めき立ち、この風のやまぬうちに、必ず一会戦あらんという事でござります。皇叔のお手許にはまだ何等の情報も集まつてまいりませんか」

「いや、夜来頻々、急を告げる報は来ているが、いかにせん、呉へ参っている軍師諸葛亮の帰らぬうちは……」と、語り合っている折へ、番将の一人が、馳け上がつて来て、

「ただ今、樊口の方から、一艘の小舟が、帆を張つてこれへ参る様子。舳にひるがえるは、趙子龍の小旗らしく見えます」と、大声で告げた。

「さては、帰りつるか」

と、玄德は劉琦と共に、急いで樓を降り、埠棧に佇んで待ちかまえていた。

果たして、孔明を乗せた趙雲の舟であった。

玄德のよろこび方はいうまでもない。互いに無事を祝し、袂をつらねて、夏口城の一閣に登った。

そして、呉魏両軍の模様を質すと、孔明は、

「事すでに急です。一別以来のおはなしも、いまは審らかに申しあげている道もありません。君には、味方の者の用意万端、抜かりなく調べておいでになられますか」

「もとより、出動とあらば、いつでも打ち立てるよう、水陸の諸軍勢を揃えて、軍師の帰りを待つこと久しいのじゃ」

「しからば、直ちに、部署をさだめ、要地へ向け、指令を下さねばなりません。君に御異議がなければ、孔明はそれから先に済ましたいと思います」

「指揮すべて、軍師の権と謀りをもって、即刻にするがいい」

「僭越、おゆるし下さい」と、孔明は、壇に起つて、まず趙雲を呼び、

「御身は、手勢三千をひきつれ、江を渡つて、烏林の小路に深くかくれ、こよい四更のころ、曹操が逃げ走って来たなら、前駆の人数はやりすごし、その半ばを中断して、存分に討ち取れ。——さは言え、残らず討ちとめんとするにはならん。また、逃げるは追うな。ころあいを計つて、火を放ち、あくまで敵の中核に粉碎を下せ」と、命じた。

趙雲は畏まって、退がりかけたが、また踵を回して、こう質問した。

「烏林には、二すじの道があります。一条は南郡に通

じ、一条は荊州へ岐れている。曹操は、そのいずれへ走るでしょうか」

「かならず、荊州へ向かい、転じて許都へ帰ろうとするだろう。そのつもりでおれば間違ひはない」

孔明はまるで掌の上をさすように言つた。そして、次には張飛を呼んだ。

三

張飛に向かつては、

「御辺は、三千騎をひきつれ、江を渡つて、夷陵の道を切り塞がれよ」と、孔明は命じた。

そして、なお、

「その葫蘆谷に、兵を伏せて相待たば、曹操はかならず南夷陵の道を避けて、北夷陵をさして逃げ来るであらう。明日、雨晴れて後、曹操の敗軍、この辺りにて、腰兵糧を飲み用いん。その炊煙をのぞんで一度に嗅きかかり給え」と、つぶさに教えた。

張飛は、孔明のあまりな予言を怪しみながらも、「畏まった」と、心得て、直ちにその方面へ馳せ向かう。

次に、糜竺、糜芳、劉封の三名を呼び、

「御辺三人は、船をあつめて、江岸をめぐる、魏軍營、潰乱に陥ちたと見たら、軍需兵糧の品々を、悉皆船に移して奪い来たれ。また諸所の道にかかる落人どもの馬具、物の具なども余すなく鹵獲せよ」と、いいつける。

また、劉琦に向かつては、

「武昌は、緊要の地、君かならず守りを離れたもうなかれ。ただ江辺を固め、逃げ来る敵あらば、捕虜として味方に加えられるい」

最後に、玄德を誘って、

「いで、君と臣とは、樊口の高地へのぼって、こよい周瑜が指揮なすところの大江上戦を見物申さん。——早、お支度遊ばされよ」と促すと、

「かくまでに、戦機は迫っていたか。儼もこうしておられまい」

と、玄德も取り急いで、甲冑をまとい、孔明と共に、樊口の望台へ移ろうとした。

すると、それまで、なお何事も命ぜられずに、悄然と、一方に佇立したひとりの大将がある。

「あいや、軍師」と、初めて、この時、ことばを発した。

見れば、そこにただ一人取り残されていたのは、関羽であった。

知ってか、知らずか、孔明は、

「おう、羽將軍、何事か」と、振り返って、しかも平然たる顔であった。

関羽は、やや不満のいろを、眉宇にあらわして、

「先ほどから、いまだに重命もあらんかと、これに控えていたが、なおそれがしに対して、一片の御示命もなきは、いかなるわけで御座るか。不肖、家兄に従うて、

数十度の軍に会し、いまだ先駆けを欠いたためしもないのに、この大戦に限って、関羽ひとりをお用いなきは、何か、おふくみのある事か」と、眦に涙をたたえて詰め寄った。

孔明は、冷やかに、

「さなり、御身を用いたいにも、何分ひとつの障りがある。それが案じらるるまま、わざと御身には留守をたのんだ」

「何。障りありと。——明らかに理由を仰せられい。

関羽の節義に曇りがあると言わるるか」

「否。御辺の忠魂は、いささか疑う者はない。けれど、思い出し給え。その以前、御身は曹操に篤う遇せられて、都を去る折、彼の情誼にほだされて、他日かならずこの重恩に報ぜんと、誓った事がありであろうが——今、曹操は烏林に敗れ、その退路を華容道にとつて、かならず奔亡して来るであろう。故に、御辺をもつて、道に待たしめ、曹操の首を挙げることは、まこ

とに囊の物を取るようなものだが、ただ孔明の危ぶむところは、今言うた一点にある。御辺の性情として、かならず、旧恩に動かされ、彼の窮地に同情して、放し免すにちがいない」

「何の！ それは軍師のあまりな思い過ぎである。以前の恩は恩として、すでに曹操には報じてある。かつて彼の陣を借り、顔良、文醜などを斬り白馬の重囲を蹴ちらして彼の頽勢を盛り返したなど——その報恩としてやったもので御座る。なんで、今日ふたたび彼を見のがすべきや、ぜひ、関羽をお向け下さい。万一、私心に動かされたりなどしたら潔く軍法に服しましう」

四

関羽の切なることばを傍らで聞いていた玄德は、彼の立場を気の毒に思ったか、孔明に向かつて、

「いや、軍師の案じられるのも理由なきことではない

が、この大戦に当たって、関羽ともある者が、留守を命じられていたと聞こえては、世上へも部内へも面目が立つまい。どうか、一手の軍勢をさずけ、関羽にも一戦場を与えられたい」と、取り做した。

孔明は、是非ない顔して、

「しからば、万一にも、軍命を怠ることあらば、いかなる罪にも服すべしという誓紙を差し出されい」と、言った。

関羽は、即座に、誓文を認めて軍師の手許へさし出したが、なお心外にたえない面持ちを眉に残して、
「仰せのまま、それがしはかく認めましたが、もし軍師のおことばと違い、曹操が華容道へ逃げて来なかったら、その場合、軍師御自身は、何と召されるか」と、言質を求めた。

孔明は、微笑して、

「曹操がもし華容道へ落ちずに、べつな道へ通れたときは、自分も必ず罪を蒙るであらう」

と、約した。

そして、なお、

「足下は、華容山の裡にひそみ、峠の方には、火を放け、柴を焼かせ、わざと煙をあげて、曹操の退路に伏せておられよ。曹操が死命を制し得んこと必定であらう」と、命じた。

「おことばですが」と、関羽は、その言を遮って、

「峠に火煙をあげなば、折角、落ちのびて来た曹操も、道に敵あることを覚り、他へ方角を変えて逃げ失せはいたすまいか」

「否々」

孔明は、わらって、

「兵法に、表裏と虚実あり、曹操は元来、虚実の論に詳しき者、彼、行くての山道に煙のあがるのを見なば、これ、敵が人あるごとき態を見せかくるの偽計なりと看破し、あえて、冒し来るに相違ない。敵を謀るにはよろしく敵の智能の度を測るをもつて先とす——とは